報　文

「白瀧幾之助写真群」について

阿部　亜紀[1]

The Shirataki Ikunosuke Photo Collection

Aki Abe

Shirataki Ikunosuke (1873–1960) is a Japanese yōga (Western-style) painter. He was active from the Meiji until the mid-Shōwa period and was a student of Kuroda Seiki (1866-1924), the founder of Hakuba-kai, the White Horse Society of yōga painters, and a renowned master of Tōkyō bijutsu gakkō, the Tokyo Art School. This paper focuses on a group of photographic materials that are believed to have been previously owned by Shirataki. It is currently housed at the Maezaki Laboratory at the Department of Lifestyle and Art of the Kyoto Women's University. The materials consist of about 1,500 photraphies, one diary and one letter. These photographs are not only of Shirataki but also of many other artists he had met throughout his life. The author argues that the study of these materials can enable the scholarly community to gain further insight into the contemporaneous world of yōga painting. This article is divided into two parts. The first part documents the acquisition of the materials by the current owner and provides a guide to their contents. In the second part, the author argues about the insights that can be found therein.

図１　白瀧幾之助肖像（No.75）

１．はじめに

白瀧幾之助（1873–1960）は明治時代から昭和時代中期にかけて活躍し、白馬会の創始者で近代洋画の巨匠と謳われる黒田清輝（1866–1924）に師事した洋画家である。第８回文部省美術展覧会での二等賞受賞や、帝国美術院美術展覧会での審査員など、官展で活躍。昭和27年（1952）には、洋画界での功績を称えられ日本芸術院恩賜賞を受賞し、20世紀前半の日本を代表する洋画家のひとりに数えられている。しかしながら、これまで近代絵画史において白瀧とその作品が積極的な研究対象になることはなかった。先行研究としては、同氏の出身地近郊・兵庫県姫路市に位置する姫路市立美術館で平成22年（2010）に開催された『没後50年白瀧幾之助展』[1)]と、それに関連して発表された平瀬礼太氏による研究[2)]の２報に留まっている。

本論の中心と成るのは、この白瀧幾之助が旧蔵していたと思われる一群の写真資料で、現在は京都女子大学家政学部生活造形学科前﨑研究室（而中文庫）の所蔵となっている。本資料に含まれた写真の総数は約1500点に上り、その他日記１冊、書簡１通が含まれている。とくに白瀧家の家族アルバム、留学期

[1] 本学大学院家政学研究科生活環境学専攻博士後期課程

のアルバム、個別の写真（計276枚）には、白瀧のみならず彼と交流のあった芸術家たちも多く含まれている。したがって、本資料を精査・研究することは、近代洋画研究に新たな知見を提供できると考えられる。

筆者はこの「白瀧幾之助写真群」（以下、「写真群」）の整理・研究を進めてきた。本稿の前半では資料が現在の所有者の手に渡るまでの経緯を確認するとともに、撮影された内容の整理を行い、後半では集合写真に注目し、本資料が近代洋画研究に提供できる新たな価値について検討を行う。なお、本論考で使用している画像で所蔵先の記載がなく番号のみのものについては、全て「写真群」に含まれているものである。

２．白瀧幾之助の略歴

白瀧幾之助は明治６年（1873）３月17日、豊岡県（現在の兵庫県）朝来郡生野奥銀谷町で生まれた。明治23年（1890）に17歳で上京後、山本芳翠（1850-1906）率いる生巧館画塾に入塾。黒田清輝がフランスから帰朝したのちには、天真道場および東京美術学校で洋画を学んだ。黒田が発足した白馬会の展覧会には第１回より出品し、設立当初からの会員として知られている。また、同氏は明治28年（1895）の第４回内国勧業博覧会で《待ち遠し》が褒状を受賞。明治33年（1900）のパリ万国博覧会でも褒状、明治36年（1903）の第５回内国勧業博覧会で三等賞を受賞し、評価を得ていた。

その後、現地の洋画を学ぶため洋行。明治37年（1904）より欧米諸国で約７年の歳月を過ごし、留学中はアメリカ人画家のロバート・ヴォノー（Robert William Vonnoh, 1858-1933）や、フランス人画家のラファエル・コラン（Raphael Collin, 1850-1916）に師事した。帰国後は風俗画のほか肖像画や水彩画にも力を注ぎ、印象派らしい点描画にも挑戦している。以降、大正２年（1913）の第３回東京勧業博覧会で三等賞、大正３年（1914）の東京大正博覧会で銀牌、第８回文部省美術展覧会では《野村氏の像》が最高賞の二等賞を受賞するなど、広い画域を保ちながらも着実にその名を残した[3]。一連の評価を得ると、文部省美術展覧会、帝国美術院美術展覧会での審査員など官展での活動を続け、大正11年（1922）に再び洋行。古典的な顔料の研究も本格的に始動し、昭和３年（1928）には岡田三郎助（1869-1939）らとともに日本テンペラ画会を設立するなど精力的な活動を続けた。また、昭和27年（1952）には洋画界での功績を称えられ日本芸術院恩賜賞を受賞している。

３．「白瀧幾之助写真群」入手の経緯

「写真群」は平成30年（2018）２月に京都女子大学の前﨑信也准教授が古書店から購入したものである。同氏は京都市立芸術大学において同大学が所蔵する富本憲吉関連資料の研究を遂行。この資料の中には、富本と白瀧間でやり取りされた絵手紙が数多く残されている。今回研究対象としている「写真群」には、富本憲吉の写真が数点含まれていたこと、そして白瀧本人、もしくは親しい人物が所有していたと考えられる内容であったため、購入に至ったという。

これらの資料は当初、小さめの段ボール箱に複数のビニール袋に小分けにされていた。何百枚という写真が無造作に重ねて入れられている袋もあり、アルバムや写真が乱雑に梱包された状態で届いたという。販売元の古書店にこの資料の出所を問い合わせたが、明確な回答を得ることはできなかった[4]。また、本資料は劣化が懸念されたため、同年４月の調査開始時には中性素材のケースおよび封筒を用いた保管方法を選択し、その後資料活用のためにスキャニングによるデジタル化を行った。

これらの作業と同時に「写真群」が販売されるに至った背景を調査するために、先述した白瀧幾之助研究の第一人者である平瀬礼太氏をはじめ、白瀧幾之助の長男・弥彦の妻で彼らと同居をしていた故白瀧弘子氏（取材当時99歳）と、白瀧の孫にあたるお２人にお話しを聞く機会を得たが、この「写真群」の存在を知る人はいなかった。同時に、本資料には白瀧家の家族写真も含まれているため、ご親族からは「もしも存在を知っていたら売るはずはない」との回答を得た[5]。一方「写真群」が販売された平成30年（2018）初頭に、白瀧家が田園調布の自宅を売

却する際、専門業者に依頼して倉庫の中を一掃してもらっていたという事実も明らかとなった。つまり、本写真群は白瀧の死後も長期にわたって自宅の倉庫内に人知れず保管されていたものであると考えられるが、その真相は明確なものではない。とはいえ、これらの「写真群」の内容を見れば画伯の旧蔵品であることは明らかであり、そうでなければ不合理な写真が多く含まれているという証言もご親族から得たのであった。

４.「写真群」の概要

写真の総数は約1500点に上り、その他日記１冊、書簡１通が内包されている。箱の中は４袋に分かれていたが、白瀧が投影されている写真はその中の１袋に集められ、その他は風景写真が大半であった。これら３袋に入った写真が白瀧のものであるかどうかは定かではない。こうした「写真群」の状況を踏まえ、本稿では確実に白瀧と関係する写真資料276点を研究対象として選定。更に「家族アルバム」「留学期のアルバム」「個別写真」の３つにグループ分けを行なった。

【資料１】家族アルバム

写真群の一部は、白瀧家の家族アルバム、白瀧幾之助の留学時代のアルバムに貼付されている。家族写真のアルバムは縦16.3cm ×横22.5cm ×厚さ2.8cmで、計38枚の写真が納められている。ページ数は24ページで、そのうち14ページに写真が貼付されていた。主な被写体は、母の白瀧美代、妻の志保、次女の須磨、長男の弥彦。その他、自宅のアトリエで白瀧の制作中に撮影された写真や、自宅の外観写真も包含されている。また、白瀧の画家としての一面はもちろん、家族と接する際の素顔を示しているという意味でも、重要な資料として位置付けられる。

図２　家族アルバム

【資料２】留学アルバム

留学時代のアルバムは、縦19.5cm ×横24.2cm ×厚さ5.6cm。ページ数は台紙73枚に表紙裏、裏表紙裏を合わせた計74ページで、計180枚の写真が納められている。白瀧幾之助は明治36年（1904）から明治40年（1907）をアメリカで過ごし、半年間のイギリス滞在を経て明治41年（1908）まで約１年間フランスで生活、そして明治43年（1910）の帰国まで再度イギリスに滞在した。留学時代の写真は、最後のイギリスで撮影されたものが大半を占め、一部がアメリカにて撮影されたものであった。なお、フランスで撮影されたと思われる写真は現時点で確認されていない。

このように、とりわけ滞英時代の写真が内包されている本アルバムでは、主に同地で交流していた芸術家たちの姿が確認された。しかしながら、これらの写真は白瀧の留学過程・時系列に沿って貼付されたものではなく、その順番によって留学期の足取りを辿ることも、撮影年の特定も困難であり、文献資料などを精査し、白瀧の動向と写真との関連性を徐々に解き明かす必要があった。

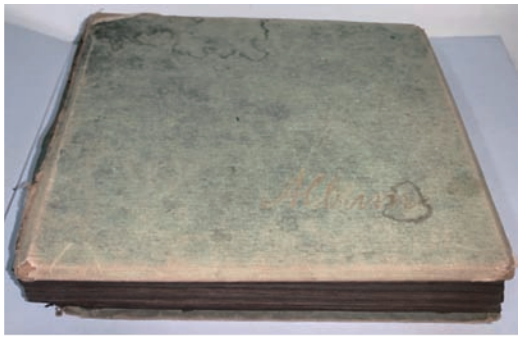

図３　留学アルバム

５．写真に写る知人・友人たち

写真には白瀧の外にも彼の多くの知人・友人が投影されていた。これまでの研究で判明した人々が以下の通りである。

（各五十音順）

【留学中の写真（芸術家）】

・稲垣吉蔵（1876-1951）・大隅為三（1881-1961）
・大沢三之助（1867-1945）・菊池鋳太郎（1859-1944）
・久米桂一郎（1866-1934）・菅原精造（1884-1937）
・高村光太郎（1883-1956）・富本憲吉（1886-1963）
・畑正吉（1882-1966）・藤川勇造（1883-1935）
・南薫造（1883-1950）・三宅克己（1874-1954）
・茂木習古（生没年不詳）・安井曾太郎（1888-1955）
・和田三造（1883-1967）

【留学中の写真（その他）】

・稲田三之助（1876-1952）・佐藤功一（1878-1941）
・日高胖（1875-1952）・藤村増喜（生没年不詳）
・藤村義朗（1871-1933）

【日本での写真（芸術家）】

・青山熊治（1886-1932）・安藤仲太郎（1861-1912）
・磯野吉雄（1875-1948）・岡野栄（1880-1942）
・岩村透（1870-1917）・加藤太郎（1915-1945）
・鎌田正蔵（1913-1999）・北蓮蔵（1876-1949）
・黒田清輝（1866-1924）・小林萬吾（1870-1947）
・佐野昭（1866-1955）・高木背水（1877-1943）
・辻永（1884-1974）・中澤弘光（1874-1964）
・中村勝治郎（1866-1922）・長原孝太郎（1864-1930）
・丹羽林平（1870-1919）・藤島武二（1867-1943）
・平岡権八郎（1883-1943）・真野紀太郎（1871-1958）
・矢崎千代二（1872-1947）・湯浅一郎（1864-1931）

【日本での写真（その他）】

・田沢田軒（1885-1952）・坂田武雄（1888-1984）
・長尾建吉（1860-1938）・長谷川仁（1897-1976）
・長谷川林子（1896-1985）
・町田善太郎（生没年不詳）・湯沢三千男（1888-1963）

【その他（要検討）】

・田中寅三（1878-1961）・野口米次郎（1875-1947）

6．東京文化財研究所所蔵写真との比較

ここから写真群の中でも白瀧の交友関係を明瞭化する上で意義の高い写真を、紙面の関係上２点のみ取り上げる。「写真群」には東京文化財研究所所蔵の写真資料と関係が深いものが含まれている。

白瀧幾之助は、明治26年（1893）にフランスから帰国した黒田清輝、久米桂一郎に師事し、明治美術会[6]に所属していたが、黒田を中心に西洋の技術を基盤とする団体・白馬会[7]が結成されると同会を退会。当時、白瀧を含む黒田ら周辺の洋画家は「新派」「紫派」、工部美術学校より派生した洋画家は「旧派」「脂派」と称され差別化されていた。

その後、白馬会は同年10月に第１回白馬会展を開催し、明治44年（1911）に解散するまで全13回の展覧会が開催された。白馬会の解散後は、同会を中心に活躍していた中澤弘光、山本森之助（1877-1928）、三宅克己、杉浦非水（1876-1965）、岡野栄（1880-1942）、小林鐘吉、跡見泰の７人[8]の洋画家により「各自の研究、後進の誘導を目的」[9]とする組織・光風会が結成され、今もなお継続している。

図４　白馬会集合写真（No.81）

図５　白馬会集合写真（No.81）一部

本写真は明治37年（1904）に下総関宿付近（千葉県東葛飾郡）で撮影された白馬会の会員旅行の集合写真である[10]。白瀧は同年５月に渡米していること

から、春頃に遂行された旅行であることが推測される。本写真は東京文化財研究所で保管されている写真と同一のものであるが、上部に苗字が記載されているため（図５参照）参加者個人の特定が可能となり、近代洋画研究において重要な役割を果たす資料として位置付けることができる。

写されているのは最前列左から磯野吉雄、高島（詳細不明）。２列目左から長原孝太郎、藤島武二、菊池鋳太郎、矢崎千代二、湯浅一郎、小林萬吾。３列目左から黒田清輝、安藤仲太郎。４列目左から白瀧幾之助、中澤弘光、佐野昭、岩村透、中村勝治郎、高木背水そして北蓮蔵。いずれも白馬会を中心に洋画界を牽引していた芸術家である。

こうした会員旅行は度々催行され、大正元年（1912）６月14日にも白馬会会員の岩村透、菊地鋳太郎、岡田三郎助、矢崎千代二、和田三造、岡野栄などが参加し、千葉県懸金町から徒歩で柴又に遊んだこともあった[11]。また、白瀧が和田英作（1874-1959）に宛てた書簡では明治32年（1899）８月27日[12]からしばらく、小林萬吾や藤島武二らとともに三浦半島の北下浦（現在の横須賀市）に写生のため行動を共にしていた様子が記されている[13]。ただし、これらに関する写真は未だ発見されておらず、現存する本集合写真は希少な資料であることが指摘できる。

図６は、イギリスで撮影された写真である。白瀧は明治36年（1904）から明治42年（1910）にかけてアメリカ、フランス、イギリスへ留学しており、帰国直前に撮影されたものと考えられる。

図６　イギリスでの撮影写真（No. 274）

左から和田三造、菊地鋳太郎、三宅克己、茂木習古、白瀧幾之助の姿が確認でき、一番右の人物については素性が明らかではない。左から２番目にあたる菊地鋳太郎は、白馬会設立時（1898）に私邸を白馬会洋画研究所として約１年間提供した人物であった。写真資料が発見されるまでは白瀧とどのように交流していたか不明点が多く、同氏の写真資料も極めて希少である。

白馬会はその後、菊池の私邸から赤坂、溜池の合田清の工房に移転し、第２菊坂、第３駒込と続けて造設された。この２箇所目の溜池研究所で洋画を習得していたのが左端の和田三造だ。同氏は白瀧と同郷の洋画家であり、共に生野三巨匠のひとりに数えられている。本写真は帰国直前の白瀧と和田が、日本に留まらず異国の地でも交流していたことを示す貴重な１枚である。

左から３番目の人物は水彩画家の三宅克己である。画学生時代は曾山幸彦（1860-1892）や原田直次郎（1863-1899）に師事したが、来日中のイギリス人画家ジョン・ヴァーレー・ジュニア（John Verley Jnr. 1850-1933）の水彩画に感化され、水彩画家に転身。白馬会展覧会にも多くの水彩画を出品した。後述の通り、本写真は日英博覧会が開かれた明治43年（1910）に撮影されたと推測される。この時は三宅にとって３度目の洋行にあたり、約１年半でヨーロッパ各地からエジプトまで足を延ばし、300点以上の写生を行なった時期であった。

茂木習古は、三宅克己が明治26年（1893）頃に師事した石版画工として伝えられるが、その詳細につ

図７　『畑正吉フランス留学期写真資料』
（東京文化財研究所）
https://www.tobunken.go.jp/materials/hatapict/242722.html
（閲覧日 2020-12-05）（一部）

いては明らかではない。明治43年（1910）に日英博覧会を機に渡欧していたことから、この時に撮影された可能性が高い[14]。

図７は、東京文化財研究所に所蔵されている畑正吉旧蔵写真である。２枚の写真を比較すると、背景の石造りの建物や全員の服装、図６で和田三造が口に咥えているキセルを図７では手に持っている点など、それぞれの小物も一致する。撮影年は明治43年（1910）と原板に記載され、図６も図７と同様同年に撮影されたものだと考えられる。また、それぞれの写真に写る人物が１人ずつ入れ替わっているという点から、図６は畑正吉、図７は図６で右端に写る人物が撮影者である可能性が高い。

７．結　論

本研究では白瀧幾之助の親族への聞き取り調査をおこない、「写真群」が同氏旧蔵である可能性が高いことが明らかとなった。また、そこに映し出された彼の知人・友人の特定によって、文献や作品調査では把握しきれない交友関係の広がりを確認することができた。黒田清輝の弟子であり、戦前戦後の洋画界で活躍した同氏の人的ネットワークを知ることは、今後の洋画研究に大いに資することだろう。

本論では紙幅の関係から数点の写真の検討にとどまったが、「写真群」を題材とした研究成果についても随時発表を続ける予定である。また、公開可能な写真については、できるだけ早くインターネット上で発信することも目標としたい。

謝　辞

末筆ながら本研究を進めるにあたり、今井直一様、上林喜美子様、木戸恵美様、故白瀧弘子様、平瀬礼太様、前﨑信也様、南健様、南八枝子様（五十音順）をはじめ、多くの方々から多大なるお力添えをいただきました。心から感謝の意を表します。

注

1）姫路市立美術館『白瀧幾之助展 ―没後50年―』姫路市美術館、2010、123pp.
2）平瀬礼太「白瀧幾之助　文献再録」『姫路市立美術館研究紀要』第11号、2010 pp.1-15
3）姫路市立美術館『白瀧幾之助展 ―没後50年―』姫路市美術館、2010、123pp.
4）前﨑信也氏へのインタビュー。実施日：平成30年（2018）４月27日
5）白瀧弘子氏へのインタビュー。実施日：平成30年（2018）８月１日
6）明治22年（1889）に発足した日本で最初の洋風美術団体。国粋主義の渦中、東京美術学校に西洋画科が開設されなかったことから、これに対抗するため発足した。
7）明治29年（1896）６月に、黒田清輝を中心に結成された洋風美術団体。外光的表現を基盤に置き、洋画界に新風を吹き込んだ。1896年（明治29）に開催された初回展は、総勢17名が参加。翌年の第２回展では白瀧の代表作《稽古》を出品した。
8）光風会『第１回展光風会目録』「設立趣意書」、1912
9）石野隆『全国美術展出品案内』美術学院出版、1942 p.59
10）村田真『週刊日本の美をめぐる：黒田清輝洋画への挑戦』小学館ウィークリーブック、2003 p.29
11）同 p.29
12）児島薫「藤島武二による黒田清輝、久米桂一郎宛書簡について（三）― 留学前後の動静を中心に ―」美術研究、第417号、2016　p.78
13）東京文化財研究所『黒田清輝著述集』：東京白瀧幾之助より伯林和田英作宛書簡 (明治三十二年十月九日)、2007 pp.428-430
14）岩切信一郎「三宅克己の水彩画普及と石版画」（徳島県立近代美術館『水彩表現の開拓者　三宅克己回顧展』、2014